### <前穂高東壁事件の現場調査>

昭和30年8月6日

天候 曇一時夕立

湿度 38%(毛髪湿度計)

温度 21.5度

## [調査班]

伊藤経男・石原一郎・石原國利・澤田榮介・長谷川光男・毛塚一男

「現場調査時の見物者]

北穂会:山本和雄氏(後に岩稜会員となる山岳写真家)・信州大学山岳部員:2名・南山大学山岳部中世古隆司氏(後に日本山岳会東海支部長を務める)、他1名

## [作業概況]

又白池テント発(8:30)

現場到着と同時に準備開始(10:00)

現場測量作業開始(10:30) 同終了(12:30)

テグス試験開始(12:40) 同終了(13:05)

石膏作業開始(13:15) 同終了(14:10)

全作業終了(14:10)

前穂頂上にて昼食後出発(15:00)

又白池テント着(15:30)

テント撤収出発(16:45)

上高地着(22:30)

### [現場にて拾得物]

1.ザイルをかけた岩角に付着していたもの…ナイロンザイルの糸屑(3 種類、ビニール袋に入れて帰る)

2.ビバーク地点にて…ビバーク当時使用のマッチ軸・ビニール袋(昼食を入れたもの)・タプソール(外用鎮痛消炎軟膏)の効能書・パラシュートの絹紐・チリ紙等

# 調査の詳細

昭和30年1月2日前穂高東壁における遭難の原因を究明するためには、同行者の言の真実性を確かめる必要がある。そのため同行者(石原・澤田)を伴って現場に赴き、彼らの発表したザイル切断状況について実地調査した。

昭和30年8月5日、伊藤経男以下岩稜会員6名は、遺体の荼毘を終わったので、かねての計画通り、ザイル切断現場を調査するため、又白池に登った。

翌8月6日、当日の天候は風はほとんど感ぜられなかったが、朝から曇っていて、東壁 一帯は終日ガスに閉ざされていた。

午前8時30分又白池を出発。途中A沢踏み替え点にて、我々より一足先に池を出発し、松高第一尾根へ向かわれた北穂会山本和雄氏他、信大山岳部2名と会った。

午前 10 時前穂高岳頂上着。午前 10 時 30 分石原一郎、石原國利の 2 人は澤田榮介、毛塚一男両名の確保の下に懸垂で下降。今冬のオカン場(仮眠した場所)らしい場所に着いた。この場所にチリ紙、マッチの軸等が残置してあるのを見て、オカン場であるのを確認した。この位置は次の如くであった。(図 1 参照)

前穂高頂上から東壁の上縁にそって高さにして 10~15m 程下った所にちょっとしたテラス(岩棚 T1 とする)がある。つまり東壁 A フェース(岩壁)の登攀終了点である。そのテラスよりやや幅広いチムニー(岩溝)が約 10m 下に落ち込んでいる。チムニーの下端より左側は横幅約 20m 傾斜 45 度程度の斜面となっていて、約 20m で A フェース下部に続く。右側はほとんど垂直な壁で、この岩にそって 7~8m 下ると、そこで右側の壁は切れていて、そこを右へ廻り込んだ地点がそれである。オカン場は、三人が辛うじて並んで腰を下ろせる程度の平たい岩である。今冬の墜死者若山は、この岩の右端から約 1.5m 上に登り、更にその上にある幅約 60cm、長さ約 3.5m のチムニーを登り、そのチムニーの出口の庇状に突出した岩にザイルをかけ、右側の壁に移り、右へトラバース(横断)せんとしたがおよばず、現位置から再び行動を開始しようとした時に左足を滑らし、前記突出せる岩を支点として振り戻され、ザイルが切れて墜落して行ったのである。今冬の事故発生当

時、墜死者若山が登ってみる直前に、石原國利は前記チムニーを登り、前記突出した岩に ザイルをかけて、チムニーの直登を試みていたので、今回再びチムニーを登ってみること とし、チムニーの右の壁にハーケンを打って確保となし、前記突出した岩に触れてみたと ころ、今冬に於ける感覚と完全に一致した。そこでそのままチムニーを抜けて、前記突出 せる岩の上部に出て、今冬ザイルをかけたと考えられる部分を観察してみたところ、驚く べきことにナイロンの糸屑 3 種を発見した。現場調査隊は事故は岩角でザイルが切断した ためだという考えは、もはや決定的であると話し合った。

ザイルの切断箇所が判明したので、次に切断時に於ける位置関係を明確にするために、 巻尺によって測定した。結果は2図の如くであった。(図中に入れた人物及びザイルの張り 方などは、墜死者若山及び石原の身長並びに遺体に結ばれていたザイルの長さを慎重考慮 して描いたものである。)

次にザイルをかけた岩の状態及び、切断箇所の突鋭度その他を調査するため次の仕事をした。

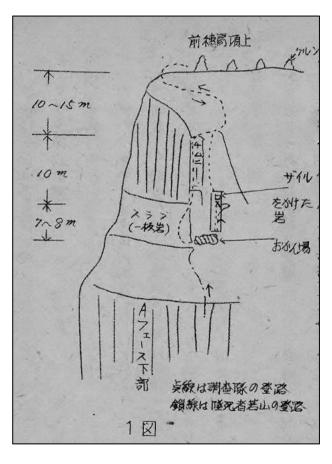
- ① 岩角は稜角約 90 度で、稜は約 8cm にわたり鋭い部分とやや緩い部分とが断続している。(3 図)
- ② ザイルをかけた岩角の突鋭度を調査するため東洋レーヨン製 9 厘〔この古い単位の厘に関して:1厘=0.3mmで、9厘=2.7mmになる。釣り糸の単位は1厘1号であったが、その1厘は0.165mmとしていた。現在9号の釣り糸は市販されていない。8号0.47mm,10号0.52mmなので、9厘ではなくて、9号約0.5mmではないかと考察する〕魚釣り用テグスを使用して荷重テストを試みた。しかし、ザイルが動いたと思われる間隔で実験を行った為、データがまちまちである。(実験5回…2kg,5kg,6kg,3kg,5kgでテグスが切れた)念のためにその実験方法を記せば、前記テグスを各々2mの長さに切り、一端に20kg用バネ秤を結び付けた。先刻打ったハーケンに、12mm麻ザイルを固定して、テグスの中央部がエッジに当たる点で、テグスの一端と結び合わせた。テグスを前記の岩にかけ、テグスの他端にも12mm麻ザイルを結び合わせて、秤の目盛りを読みながら若山の落下方向に徐々に引張ってテグスの切れたkg数を前記値とした。

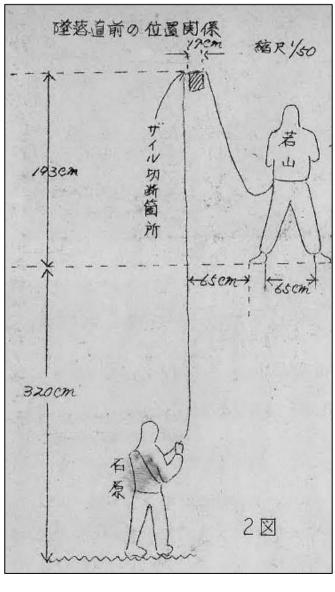
尚、この実験中、先記山本氏以下 3 人の方々が上部テラスまで来られ終りまで参観され

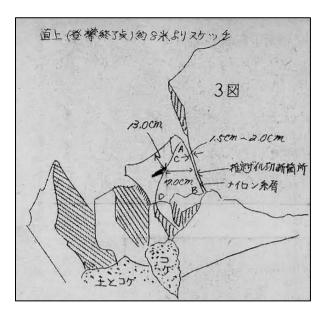
た。

③ ザイルが切断した箇所の岩角の石膏型を取るために、準備してきた用具を上部テラスから吊り下げてもらい、飯盒でカリ石鹸及び石膏を溶き、まずカリ石鹸を岩の表面に塗って石膏を流したが、カリ石鹸の量が少なかったためか、石膏の分離が巧くゆかず、第一回目は失敗した。それで二回目は充分にカリ石鹸を塗布し、再び石膏を流したところ、今度は成功した。(4図参照)石膏型を取っていた頃、又白池にテントを張っていられた南山大学の中世古隆司氏他一名がAフェースを登って来られた。石膏の型取りが終わったので、前記石原兄弟は上部テラスまで登り、午後2時10分調査を終えた。

調査の運営上の指導は、上部テラスにて伊藤経男が担当し、かつ記録した。







稜線 AB は稜線 CD に対して水平線に対し約20cm 高い

AB,CD の稜角はいづれも約 90 度

明記和30年8月6日 天候 臺 - 特夕立 湿度 3分%

場度(21、か。

作業概况(8.30) 又自于小生荣理唱的着下同时:华衛月

又白于小生荣 現場名着下同时: 华藩南的 (10.00)

理場測量作業岗档 10.70 時

テグス部多家 南始 12.40×

· 除予 13.05 x

セワ2分俗葉 内的 13.15 ×

終予 14.10 4

全作業終予 14.10人

前方項上三方面食 生彩 15味00

于以著 15.30分

于小散发出者。16,45% 上高地着 22,30%

"/

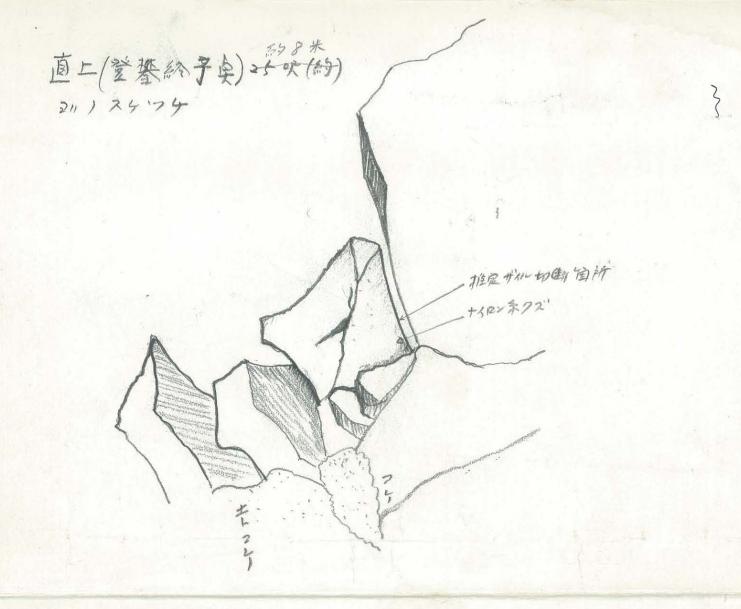
調查班名录一部石原国利法田等介、長台川之在臣王塚一男、汗蘇於男

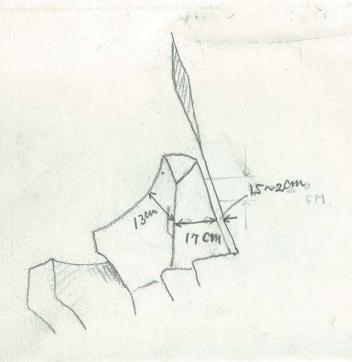
現場ニテ拾得サかり「チィロンザイルの参クス」(三種類、サキールの質にいめて持ち齢る)

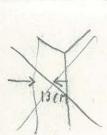
2)ビルリサカンやけは原用、マワケノジク、ナイロンな(昼会ランレクマン)

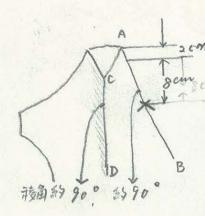
現場調查時/見物看

北德会山本的,信州大学山岳部員=名

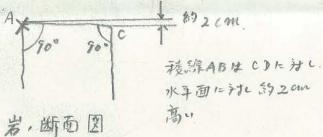




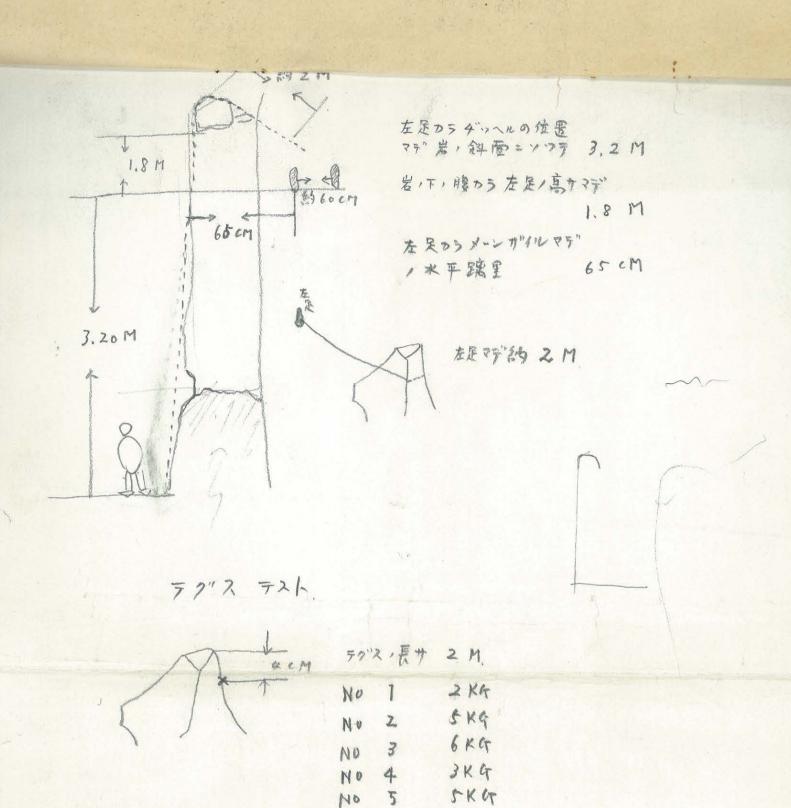


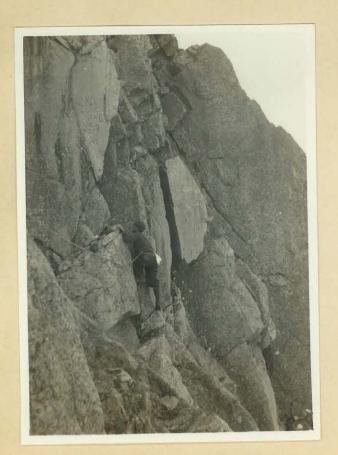


上部回り約28触ハスルドラナイ88mハスルドラナイ

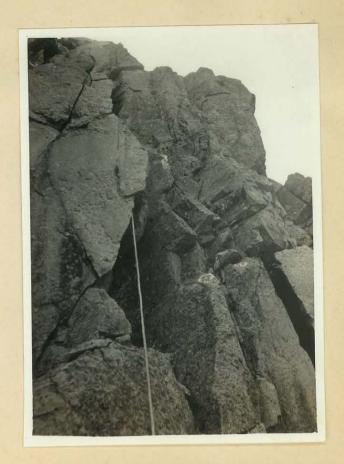


岩,断电区 对定×印切断力并





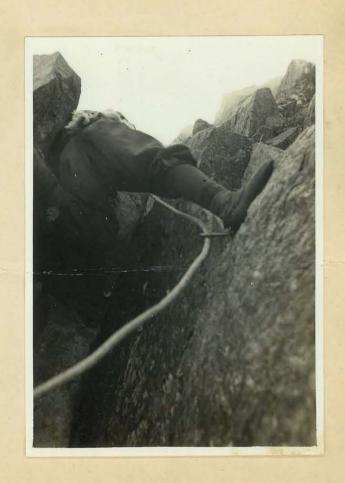
足下のくなみは ビバーク地兵



日星のかけ 墜落直前の若山の 足のあったはめ



ビバーク 地美 芝に ビバーク 状況











ザれも 肉題の岩角にかけれ

